Jérôme Rousseau, *Rethinking Social Evolution: The Perspective from Middle-Range Societies*, Montreal: McGill-Queen's University Press, 2006. viii+291pp. hardback US$85; paperback US$29.95

中尾　世治

1

日本語による文化人類学のなかで進化が論じられなくなって久しい[1]。このような現状のなかで、おおくの文化人類学者にとって、進化を論じること自体が自明なことではないだろう。そのため、『社会進化再考』と題された本書を評するにあたって、近年の動向を踏まえた上で、進化を問うことの意義を述べなければなるまい。しかし、残念ながら本書ではこれらのことが明示的には書かれていない。したがって、まず進化をめぐる近年の動向、進化への問いの評者のかまえを簡潔に述べ、それを踏まえて、本書の紹介をおこなった後に、本書の学説史上の位置づけと今後の展望を述べたい[2]。

2

1980 年代以降、西欧中心主義的なイデオロギーが内包されていること、対象社会の歴史的コンテクストを無視していたことから新進化主義への批判が高まり、進化という問題設定そのものが文化人類学において懐疑的にうけとめられ、進化の議論は理論志向の強い考古学を中心に展開していった(Trigger 1998: chp9)。その一方で、1970 年代半ば以降、生物進化のパラダイム転換をうけて、社会生物学・進化心理学・生物学の哲学の領域において人類の文化／社会の進化がさかんに論じられ、近年、一部の文化人類学者もこれに呼応している(cf. アンジェ 2004; Boyer and Bergstrom 2008; 中尾 2010)。そこでは、模倣バイアスや心のモジュールなどの分析枠組みを用いて、利他行動の起源・宗教実践の伝播のプロセスなどが論じられている。こうした議論は、たとえば個体群の生存戦略とその選択のメカニズムなどといった生物進化の問題設定に多くを負っており、かつて新進化主義が論じた社会進化の議論とは隔絶している。このような現状において求められるのは、生物進化の分析枠組みや問題設定をそのまま文化人類学に導入することではなく、生物進化の問題設定を社会進化の問題設定へと組み換えることであり、新進化主義以降の社会進化をめぐって論じられてきた成果を明らかにすることである。後者はまさしく本書から得ることができるだろう。それでは、前者について述べておこう。

---

[1] 例外として、『集団 人類社会の進化』(河合 2009)があげられる。ここでは同書の内容については踏込まないが、霊長類学、生態人類学、文化人類学との交錯をこころみた同書において、理論的な考古学や民族考古学はほとんど参照されていない。ここでとりあげるルソーの著作はこの点を十分に補うものである。

[2] 複合社会の出現を説明するエージェンシー論を前提とした上での、比較的オーソドックスな書評(Roscoe 2008)はすでになされている。本稿とともにあわせて参照されたい。

3

社会進化への問いとはいかなるものであるのか。生物学の哲学は、たとえばつぎのようなことを生物進化への問いとして提示する。生物進化を説明する原理として自然選択を用いるとして、自然選択は個体･集団･遺伝子のどのレベルで働くのであろうか(松本 2010: 1)、と。ここでは生物進化を説明する原理が設定され、その原理が必然的に含みこむ問題を問いとしている。それでは、社会進化の説明とはいかなるものであり、その説明はどのような事柄を問題とするのであろうか。

ごく素朴に考えてみよう。バンド社会も国家も同じヒトの集団であるが両者は著しく異なる。言い換えれば、ヒトの生物的な特性だけで、ヒトの集団の規模が増大することや集団のなかでのモノの量が増大すること、そしてヒトとモノの配置に奇妙な偏りがあることを説明することができない。したがって、生物進化の説明ではない社会進化の説明が要請される。しかし同時に、集団のなかで、ヒトが生存のためのニーズ(必要なもの／困窮)を享受しつづけ、ながくとも 100 年のあいだを生きつづけ、生殖しつづけ、死につづけなければ、性と年齢がなくては、バンド社会も国家も破綻してしまう。言い換えれば、ヒトの生物的な特性のなにかが、バンド社会や国家ほどの変異をもつヒトの集団を規定している。したがって、生物的な特性を無視して、社会進化の説明は成立しない。このように考えれば、社会進化への問いのひとつを、つぎのように提示できる。すなわち、ヒトの生物的な特性のどの部分をどのように基盤としながら、ヒトとモノの規模や配分が変容してきているのであろうか、と。

ヒトは絶滅せず、いまだヒトの集団は変容し続けている。したがって、社会進化への問いは現在のヒトの集団を対象に含みこむ。たとえば、バンド社会から現在の国家をみること、あるいはその逆は、みのりのすくないことと考えるむきもあるかもしれない。しかし、ヒトがニーズをもつこと、そのことに応じた集団内の慣行･制度をつくりあげていくことは、ヒトとヒトの集団の普遍の特徴であって、あえて同じ地平でみることにはすくなくとも根拠がある。たとえば、バンド社会においてニーズに応じた平等的な食物の分かち合いがよくみられる。現在の日本においても、水飲み場はニーズに応じた水の分かち合いがみられる。ならば、無料食堂･無料人工経管栄養補給所･無料人工呼吸器提供場所が設置されるべきであるとなぜ問えないのか(小泉 2005: 323)。ニーズに応じた分配は往々にして「慈善」や「寛大」とみなされ例外的で特例的な措置とされ理論の埒外に置かれるが、「慈善」や「寛大」の慣行や制度はどのように理論化しうるのか(ibid.: 323)。これらの問いは、水飲み場を狩猟採集民の食物分配の差異を含み込んだ反復として把握する進化史的な視角から発せられているという点において社会進化への問いであり、互酬･再分配などといった類型ではなく、それらの類型が名指した先の慣行や制度は現在にまで差異を含み込んだ反復をいかように繰り返してきているのかという問いへと組み換えることができる。このように、社会進化への問いとは、ヒトの生物的な特性を基盤とした諸々の社会的な現象をそれらの差異と反復としてどのように捉えられうるかを問うものである。そして、ここで述べた社会進化への問いは、身近の／フィールドのいたるところの社会的な現象に拡張しうる。論点を先取りしていえば、評者のみるところ、本書の独自性とは、これらの社会進化への問いに帰せられるように思われる。

4

著者のジェローム・ルソー(Jérôme Rousseau)は、現在、カナダのマギル大学教養学部人類学科教授である。モントリオール大学で学部、修士をおえて(修士論文は「テュヌネルミウ・エスキモーにおける適応」("*L'adoption chez les Esquimaux Tununermiut*")、1974 年にケンブリッジ大学で博士論文「バルイ・カヤンの社会組織」("*The social organization of the Baluy Kayan*")によって博士号を取得している。カヤンについての研究がライフ・ワークとなっているが、理論的な関心は社会進化と不平等にある。まさにカヤンがそのような社会であるのだが、バンド社会と国家の中間に位置づけされるいわゆる中間規模社会(middle-range society)である、小規模の社会における不平等から、社会進化に関する議論のバンド社会と国家とのギャップを埋めようというのが筆者の研究の主軸である。本書は筆者が長年取り組んできたテーマのひとつの集大成としてみなすことができる。

本書の手法は、異なる社会システムの比較によって、変形可能な連続性(transformational sequences)において異なる社会システムを接合させる説明体系を構築することである(3、以下本書からの引用はページ数のみを示す)。人類の過去に関するデータを豊富に用いる考古学が主として、ある社会システムから別の社会システムへの変化を反復不可能で実際におこった歴史的な連続性(historical sequence)として提示するのに対して、過去に関して限られたデータしか持ち合わせていない人類学では、異なる社会システムを比較し、仮説として、ある社会システムから別の社会システムに変化するならば、その変化をどのように説明しうるかを検討する(4)。つまり、社会システムの変化は、実際におこった歴史的な連続性によって説明されるのではなく、異なる社会システムの比較から仮説的に設定された変形可能な連続性によって説明される[3]。本書の目的は、社会進化を説明することにある。

異なる社会システムとして本書は、単純狩猟採集民(simple hunter-gatherers)、単純中間規模社会、複合中間規模社会の 3 つの理念型を示している。そして、これらの理念型の連続性を独自のシステム論に基づいて説明しようとするのが、本書の主眼である。さて、これらの理念型を大枠で特徴づけるのは、交換の原理である。著者によれば、ウッドバーンによって提示された狩猟採集社会の二つの互酬原理である「即時リターンシステム」(immediate-return system)と「遅延リターンシステム」(delayed-return system)はそれぞれ、前者がバンド社会を基礎づける特徴であるのに対して、後者が中間規模社会・国家を基礎づける特徴であるとされる(19)。さらに踏み込んで、即時と遅延を互酬がおこなわれる際の時間の間隔の大小とみなさず、即時と遅延とは互酬の原理の違いであると再定義している(19)。「即時リターンシステム」は能力のある者からニーズのある者への物資や労働の提供であるのに対して、「遅延リターンシステム」は物資や労働の提供が同じ程度の見返りを前提としておこなわれるものであるとされる(19-20)。つまり、前者の互酬の原理において、私的所有の観念が働いていない(20)。

中間規模社会は国家と遅延リターンシステムを共有しているが、国家においては地域的なレベルと共同体レベルでの意思決定における中央集権的な体制を確立しているのに対し、

[3] なお、比較の対象として、著名で資料が豊富である南米低地、ニューギニア高地、アメリカ北西海岸、自身がフィールド・ワークをおこなったカナダ・バフィン島のイヌイットとマレーシア・ボルネオ島サラワクのカヤンが主としてとりあげられている。本書で述べられている数々の具体例は本書評では省略した。

中間規模社会は高度に階層化された意思決定のシステムが欠如しているとされる(20-21)。単純狩猟採集社会が技術と人口によって、国家は政治的経済的な中央集権制によって定義づけられ偏差が少ないのに対して、中間規模社会は共通の特徴を見出しにくく、不平等の表現形態が多様である(21)。

単純狩猟採集民と中間規模社会の社会システムの概略を踏まえたうえでの、それぞれの社会システム内･間の変動を把握するためのシステム論は、システムの均衡状態を前提とせず、システムの初期状態･最頂期と最低期(peaks and valleys)･分岐(bifurcation)に着目する(23-25)。社会システムはその初期状態として何らかの制約が課されていること、社会システムはそのシステムが最もうまく作動している状態とそうでない状態ではブレがあること、そしてそのブレがシステムの閾値を越えると別のシステムへと分岐していくことを想定し、動的なシステム論を構想している(25)。

大枠の議論が整ったところでそれぞれの社会システムのより細かな検討に入っていく。まず、ヒトの認知能力の発達が社会的な動物としてのヒトを条件づけている(38)。認知能力の発達は、少数の個体によって集団を維持することを可能にしているという点において、社会進化の基盤にある(38-39)。単純狩猟採集民の社会システムは、個人の自主性(individual autonomy)を基礎として、他の社会システムとは比較にならないほどの長い期間にわたって存続したきわめて安定的で均衡状態に近いシステムである(42-43)。このシステムを特徴づける個人の自主性は、遊動による狩猟採集という生業形態によって集団のサイズと個人間の協業の上限が規定されていることに拠る(43-44)。しかし、このシステムは、ホミニゼーション(ヒト化)以前の要因による初期状態の制約をうけている。生殖には男女のペアが必要であること、ヒトを含む霊長類は子供の養育に時間がかかり一定期間の集団の構成員が固定される必要があること、という二点の初期状態が、完全な個人の自主性に基づく集団の可変性に制約をかけている(44-46)。

個人の自主性に基づく集団内の意思決定の平等も、リーダーシップという個人の能力･年齢･性差というヒトの生物的な要因による初期状態によって制約が課せられている(51-52)。単純狩猟採集民の集団内に制度化された権力の差異はないが、男性で年長者のリーダーが存在する(52-55)。また、生物学的な差異に還元されないジェンダーの区分があり、男女の分業がみられる(55-57)。このジェンダーと年齢の社会的な差異化は人類社会全体をつらぬくインパクトをもっており、これらの差異化は社会的な変化を組織化する原型となっている(57)。

単純狩猟採集民の社会システムは、即時リターンシステムに基づくものであるが、ふたつの対極的な理念型を揺れ動いている(46)。一方の極は要求による分かち合い(demand sharing)であり、これはニーズの要求に応じ、手元にある食糧などを要求、極端な事例では盗んだとしてもその行為について干渉しないというものである(46-47)。もう一方の極は、一般化された互酬(generalized reciprocity)であり、これは道徳的義務としてニーズのある人たちと食糧などを共有するというものである(46-47)。要求による分かち合いは個人の自主性を原理とする一方で、一般化された互酬では他者への依存がある程度固定化されている(47-48)。このような単純狩猟採集民の社会システムは、個人の自主性の高まりによってシステムの最頂期をむかえ安定し、個人の自主性が低下するとシステムの不安定化を招くものとして想定されている(58)。したがって、個人の自主性と他者への依存のあいだにある

矛盾を生じさせるコストが単純狩猟採集民のシステムから単純中間規模社会のシステムへの分岐を用意するのである(59)。

このシステムの分岐は、社会を基礎づける交換の原理が即時リターンシステムから遅延リターンシステムへと移行するものとして把握される。交換をおこなう基準を諸個人のニーズにもとめる即時リターンシステムは、マルクスの『ゴータ綱領批判』の有名な一節「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて！」を原則とする(60-61)。これに対して、遅延リターンシステムは、モノや労働を提供する蓄えのある者がそれに応じた返礼をおこなうことができる者に対してなされる(61)。つまり、ここでは交換の基準が交換されるモノや労働の等価性におかれている(63)。

すでに述べたように、即時リターンシステムの一般化された互酬では道徳的義務としてニーズのある者同士の交換が成立していた。これに対して、遅延リターンシステムにおいては、等価の返礼が可能であるかどうかが交換の基準へと変化する。この変化を可能にするものが定住化である(63-64)。

定住化は必ずしも農耕化を意味しないが、リスクを分散させ即時に食糧を獲得する戦略に拠る遊動生活に対して、定住生活は同じ土地で獲得できる食糧をあらかじめ見込んで食糧獲得にかかるコストをできるだけ縮減させ獲得量を増大させる戦略に依拠する(64)。こうして定住化は、集団の規模の上限をひきあげ、即時のニーズに基づく労働から食糧獲得を見込んだ労働投資への変化をもたらし、一定規模の食糧の貯蔵を可能にさせる(64-65)。

さらに定住化は社会システムの固定的な親族単位(domestic units)をあらたに構成する。すなわち、定住化によって社会の構成員の流動性が減少し、労働力と生産物の互酬をおこない生産と消費を同じくする親族単位が経済的な単位だけではなく、政治的な意思決定の単位や個人の帰属意識の対象として出現するようになる(71-74)。そして、親族単位間のコンフリクトの調停としてのリーダーが登場し、単純狩猟採集社会でほとんど意味を成さなかった親族関係が、婚姻における女性の等価交換を基礎に、集団をくくるカテゴリーとして意味をなすようになる(74-76)。このように食糧と女性の交換が定住化に伴って一定の予測をもってなされるようになり、諸個人のニーズから等価価値へと交換の基準が変化し、社会システムの基盤に遅延リターンシステムが据えられる。

システムの分岐後の遅延リターンシステムに基盤をおく中間規模社会は単純中間規模社会と複合中間規模社会にわけられる。単純中間規模社会の特徴は、限定されたリーダーシップと競合的な平等という対比的な社会システムを軸に整理される(88-89)。限定されたリーダーシップの特徴は、ジェンダーの差異が比較的緩やかであり、個人の自立性が比較的保たれ、意思決定に多くの人間が関わる一方で、社会的カテゴリーの出現としてのリーダーの世襲が認められることに要約される(89-91)。競合的平等の特徴は、ジェンダーの差異が厳しく男性優位であり、男性にのみ自立性が担保され、男性同士の競合によって中央集権的な体制が形成されにくいこととされる(111-113)。このような単純中間規模社会において、戦争・同盟関係・交易等が権力を掌握するための政治的な手段となり、ジェンダーの不均衡な関係によって労働力・婚姻戦略の資源として女性が資本化され、若年者がすでにさまざまな権力資源を有している年長者に対して負債をもつようになっている(146-148)。より中心化の進んだ複合中間規模社会は、労働と資源へのアクセスを一部の集団に制限する周縁化の度合いによって、さらに二つの段階にわけられる(149-150)。第一段階においては、

親族単位内の境界の明確化すなわち、階層性の固定化と親族単位内の余剰の占有がみられる(150)。第二段階は、固定化されたエリート層による親族単位を越えた余剰の占有と階層制の宗教的イデオロギーによる正当化が特徴とされる(167)。

単純狩猟採集民の社会システムにおける不平等は、能力･性･年齢を基盤としながらも、その発現はリーダーに集約されていた。これに対し、中間規模社会においては、性と年齢におけるカテゴリー化がより複雑なかたちで進行している。具体例における不平等の発現の度合いはさまざまではあるが、定住化による世帯(household)の固定化は、i)世襲による老年層と若年層の世代間格差の固定化(146-148)、ii)世代間格差の実体的カテゴリーとしての年齢階梯制の出現(144)、iii)親族カテゴリーの固定化とそれに伴う婚姻戦略における女性の資本化(74-76)、iv)男女の分業の強化によって女性の自らの生産物へのアクセス権の制限(143)をひきおこす。そして、親族カテゴリーにそって女性とモノの移動と布置がリーダーシップを志向する能力のある男性同士のポリティックスによって決定される。そして、特定の親族カテゴリーが周縁化されることによって、階層の形成と固定化がなされる(149-150)。

単純中間規模社会と複合中間規模社会とは、即時リターンシステムから遅延リターンシステムへの転換ほどに劇的なものではなく、連続的であるとされ(149)、その社会システムの不安定性も特徴とされる(186)。競合的平等が社会システムを構成するようになると、リーダーは自らの地位を安定化させるために、戦争･交易･同盟などの様々な政治的手段を用い、それらの結果として、複合中間規模社会が成立するが、この複合中間規模社会のシステム自体が有能なリーダーが存在しなくては成立しないため、不安定であるとされるのである(186)。

社会進化は、単純狩猟採集民、単純中間規模社会、複合中間規模社会という異なるシステムの大枠での変化として捉えられる。そして、変化は、引き金となる環境の変化･技術の変化･人口圧の増加･偶発的な出来事(225-226)に対する、個人の行動に意図に沿った変化／個人･集団の戦略の突然変異や淘汰／それらの意図せざる結果による変化として生じる(226-229)。こうした変化は分岐を生じさせる劇的な変化とシステム内での小規模の変化に区分される(229-232)。これらの変化のメカニズムには、正のフィードバックと二者択一の軌道(alternative trajectories)がある。前者の例は定住化と社会の階層性の強化であり、これらは短いタイムスパンでは連鎖的で不可逆的な変化であるといえる(232-234)。後者の例は、人口圧の増大に対応する生産量の拡大のふたつの戦略である土地拡散型戦略と労働集約型戦略のいずれかであり、どちらが選択されるかによって社会の変動の軌道が変化するというものである(234-236)。こうした変化の引き金･種類･フィードバックと二者択一の軌道の組み合わせによって、単純狩猟採集民、単純中間規模社会、複合中間規模社会のあいだで生じる変化、すなわち社会進化を説明しうるのである。

5

以上が本書の要約である。本書は狩猟採集民の食物分配をめぐる議論と首長制社会･国家の起源をめぐる議論とをひとつの理論へと統合したものである。1960 から 70 年代、一方では、生態人類学者のリチャード･リーらによるカラハリ･サンの研究が、自然環境に適応することで狩猟採集民が低い労働投下量で高い生活水準を享受している平等主義的社会で

あることを主張し、強烈なインパクトをあたえた。同じころ、他方では、過去の社会の変化についてのシステム論による説明を主眼とするプロセス考古学の台頭に伴って、サイバネティックスを応用し国家の起源を論じたフラナリーなどが国家形成の要因と結果をつなぐフローチャートをつくりあげていた。そして、その時代、この 2 つの流れは、狩猟採集民を「豊かな平等社会」、首長制社会を再分配によって特徴づけられる階層社会として鮮明に描きだしたサーリンズ、サーヴィスらの新進化主義において結節していた。しかし、1980 年代以降、これらの議論はそれぞれ、新進化主義の前提を覆してきた。狩猟採集民は適応によってのみ単純に平等であるとはみなせなくなり、ウッドバーンやテスタールらによって、食物分配の類型が提示され、それらの類型と社会構造との相関が論じられ、あるいはそこで提示された平等性が歴史的に構築されたものであるとする「修正主義者」との議論が巻き起こった。また、アールなどがいわゆる首長制社会が再分配によって特徴づけられないことを指摘し、ネッティングらが中間規模社会という新たな類型を提示し、あるいは従来のシステム論の不備をおぎなうべく社会変動における個人の役割を強調したエージェンシー論が台頭してきた。本書はこれらの議論の蓄積を存分に生かして、かつての新進化主義のようにいま一度、社会進化という共通の土台のうえにひきあげたといえる。

一方で、本書は社会進化を論じる際にしばしばつきあたるいくつかの問題を抱えている。本書の対象となった社会の歴史は社会進化という大枠に解消されてしまうのではないか、それぞれの社会の個別の自然環境をどのように評価するのか、こうした問題は本書では論じられていない。あるいは、モノと社会システムとの関係が明らかにされておらず、本書でしめされた枠組みを考古資料の解釈に用いるには、まだ十分なものとはいえない。

そのうえで、本書の独自性は以下の 5 点にみることができる。すなわち、i)ウッドバーンの即時リターンシステムと遅延リターンシステムを人類社会を貫く交換の原理として全面展開したこと、そして、ii)「即自」と「遅延」を時間の差異ではなくニーズと等価交換の差異へと転換したことによって、食物分配の議論を狩猟採集民に限定されない問題へと押しあげ、なぜではなくどのように不平等が生じてきているのか、システムを制約する初期状態とはいかなるものであるのかということに焦点をあてることで、社会進化は、iii)ヒトの生物的な特性である年齢・性・能力の差異に依存して展開し、iv)親族や階層といったカテゴリーの増加と、v)それらのカテゴリーにそってヒトとモノの移動と布置の偏在の拡大として提示されている。

それでは、本書の地平にいかなる可能性をみることができるだろうか。さきの iii)~v)の 3 点は、本書では述べられていないが、人間をどのようにカテゴリー化し、そのなかで管理やケアを施し、どのように生かすかという生政治の変容として言い換えが可能である。このようにしてみれば、フーコーの生政治論(フーコー1986)を非西欧近代社会にも適応可能としたドゥルーズの主張(ドゥルーズ 2007: 68, 71-72, 135)は社会進化の議論を拓くためにも検討の余地がある。親族・年齢階梯制・奴隷制は規律・訓練の場であるとすれば、国家権力の生成ではなく生権力の変容の進化史はありえないのだろうか。i)~ii)の 2 点は、社会を基礎づける特徴ではなくなったがしかし存続し続けている即時リターンシステムの進化をえがく可能性を示唆している。「たとえば、われわれの社会は遅延リターン経済と責任ある互酬(accountable reciprocity)によって特徴づけられているが、われわれは一般化された互酬を破棄してきてはいない。一般化された互酬は、親子のあいだの、友人とのあいだのわれわ

れの関係性において相互行為の最も基本的なモードとして残っている。慈善は一般化された互酬の別の例である。そして、要求された分配もまた完全に消え去ってはいない。子どもたちはケアと配慮を要求するからこそすべての世代において、要求された分配は再発する。なにが異なるのかといえば、遅延リターンシステムにおいて、要求された分配は自制され制限されていることにある」(62-63)。即時リターンシステムは残り続けている。ならば、その進化史が書かれてもよいのではないだろうか。負い目などという心理的な説明やリスク拡散などといった部分的な説明ではなく、ニーズに呼応する機構が人類史を通じて生じてしまうことの説明を希求しうる方向性はあるだろう。

あまりにも遠くのところまできてしまったのかもしれない。しかし、すくなくとも、社会進化という問題領域がいまだけっして片付いていないこと、考えるにあたいすることは、了解されるのではないだろうか。

参考文献

アンジェ、R.(編)
2004 『ダーウィン文化論: 科学としてのミーム』、佐倉統ほか訳、産業図書。
河合　香吏 (編)
2009 『集団 人類社会の進化』、京都大学学術出版会。
小泉　義之
2005 「無力な者に(代わって)訴える」『情況 第三期』6(8): 310-326。
ドゥルーズ、G.
2007 『フーコー』、宇野邦一訳、河出書房新社。
中尾　央
2010 「人間行動の進化的研究: その構造と方法論」、松本俊吉 (編) 『進化論はなぜ哲学の問題になるのか 生物学の哲学の現在』、pp. 161-184、勁草書房。
フーコー、M.
1986 『性の歴史 I 』、渡辺守章訳、新潮社。
松本　俊吉
2010 「自然選択の単位の問題」、松本俊吉 (編)『進化論はなぜ哲学の問題になるのか 生物学の哲学の現在』、pp. 1-26、勁草書房。
Boyer, P. and B. Bergstrom
2008 "Evolutionary Perspectives on Religion," *Annual Review of Anthropology* 37: 111-130.
Roscoe, P.
2008 "Reviews: *Rethinking Social Evolution: the Perspective from Middle-range Societies*," *Cambridge Archaeological Journal* 18: 441-442.
Rousseau, Jérôme.
2006 *Rethinking Social Evolution: The Perspective from Middle-Range Societies*, Montreal: McGill-Queen's University Press.
Trigger, B.
1998 *Sociocultural Evolution: calculation and contingency*, Oxford: Blackwell.